
病室の私と外のあなた

白祈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病室の私と外のあなた

【Nコード】

N5101Z

【作者名】

白祈

【あらすじ】

目が覚めたならの続編。

苦しんで、苦しんだ。

私の人生はいつまで続くの？

そんな私を救ってくれたのは……

（前書き）

短い話となっております。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

同じことの繰り返し。私は病弱で、常に病院のベッドから動くこともなく、あまりにも長い入院なので、個室に移動したため病室には誰もいない。

でもそれは仕方がないことだと思っていた。私を産んだ親が悪い訳でもないから。これは、神様が一人一人に違う「運命」を渡した結果なのだから。神様からの贈り物だと考えれば、この状況が変えられないということに、諦めがつく、と。

涙を零したこともあった。なんで、私だけ、なんて考えた。病院の中で一番長く入院しているのは私だ。だから、私だけこんな目に遭っているんだと思い込み、己と神様を恨んだ。

結局それは、現実から逃げようとする私の弱さだ。

「ねえ、君」

「……………え…？」

突然声をかけられた。振り向くと、茶色い髪の子だった。私にはその人に見覚えがなかった。

「……………どなた…ですか」

激しく咳き込みながら何とか言葉を紡ぎ出す。ぜえはあと荒く深呼吸し、何とか落ち着こうとする。こんな姿、家族にも他人にも見られたくないのに。

「僕は、ちよつと下の階に入院してたんだけど、暇になっちゃって」
「そんなことが、と私は顔をしかめた。

「なら、談話室にでも行けばいいでしょう」
出来る限り早く出て行つて欲しい。そう思ったらつい冷たい口調になってしまった。否、私は他人と優しく話すことさえ忘れてしまったんだ。

だが、突然の訪問者はそんなことを気にするようすもなかった。
「ずっと入院してる僕と同一年の女の子がいるって看護婦さんが言

つてたからさ、暇かと思つて」

男の子は優しく微笑んだ。誰かに心から暖かく接されるなんて、いつぶりだろう。この男の子が本当に暖かいかは分からないけど…。私はちよつとだけ、信じたくなつた。

私は病院で唯一の長期入院者なので、看護婦たちの対応に、心からの笑顔がなくなっている。重症の私に疲れてきたのだろう。しかしそれは無理もない。だけど……。

「あ、ごめん！今日は戻るよ。退院の準備が終わる頃だしね」

「はい……」

また咳が出て、私はかなり苦しくなつた。すると、男の子は私の背中を優しくさすってくれた。

そしてお大事に、とだけ残すと男の子はそのまま私の病室から出て行つた。

――退院するんだ。

羨ましいとは思わない。思つたら、神様からの贈り物に負けてしまふから。我慢するんだ。そうすれば、誰にも気付かれないまま、誰にもこの惨めな姿を見られないまま終われるはずだから。

私の灰色以外の色が無い生活は、続くんた。あの男の子は、きつともう来ないだろう。私の見てきた人は、皆そうだった。

「ああ、苦しいよ……」

口をついて出たのは、本音。

*** **

私はあの後、そのまま病食も食べずにベッドで泣いていた。看護婦は訝しむ視線を送つただけで、何も言わなかつた。

私は、明後日に手術をすることになっている。成功率は50%。担当のお医者様は、少し難しいけど大丈夫だと言つていた。だが不安が消える訳ではない。

どんどん、と窓ガラスをたたく音が聞こえる。疑問に感じたが、うずめた顔をあげる木にもならなかつた。

「おい、君――開けて――！」

「……………!？」

必死で叫びつつ、声を抑えた感じの、昼間の男の子が、窓ガラスに張り付き、にやっと笑っていた。

私は慌てて窓を開ける。

「来ちゃった」

「いや、来ちゃったじゃなくて」

沈黙。今の状況で会話が途絶えると、ちょっと怖い。

「あのさ、君、なんか隠してるだろ？」

「……………初めて会った人に、なぜ手術のことを言わなければならないんですか」

「へえ、手術するんだ」

「……………!」

私は完璧に乘せられていた。それがおかしくて、思わず私は笑った。すると、男の子は私のあたまに手を乗せ、笑ったな、とだけ言っ
つて撫で始めた。

「ちょ、何するんですか」

「いや、なんかメイあの子に会った時みたいだなって思ってたさ」

「あの子……………」

「成功する確率は？」

「50%」

「じゃあ大丈夫だな!成功するよ」

「なんでそんなこと言えるの!?残りに私が入らないって何で分かるの!なにも知らない人が知ったような口聞かないで!」

気付けば、大声を出していた。やっぱり私は人と接することが苦手だ。

何とも言えない気持ちになって、俯く。

「……………ごめんな」

「……………え？」

「でもさ、僕たち初対面じゃないんだよ?さすがに忘れちゃったと思うけど」

私は相手の顔をまじまじと見た。幼い頃、

こんな雰囲気の子と遊んだ記憶がある。あれは、私が入院する
すこし前。幼いながらに私はあの子が好きだった。そして、いつも
互いに「大きくなったら結婚するんだ！」と言い合っていた。

「まさか……！？」

「そうだよ、だからほら、元気だして」

*** **

それから私の手術が行われる直前まで、毎日彼はやってきた。手
術が成功する確率はやっぱり不安があるけれど、彼が居れば、大丈
夫だと思えた。

あれから十数年、二人の末路をする者はいません。あの少女は手
術に成功したのでしょうか。少女は、自分によく似た黒髪の少女の
幻覚を見ました。彼の言うあの子とは？

しかしそれは、また、別の話し……

（後書き）

この続きを読みたいと思ってくださる方がいたならば、活動報告にコメントを下さい。
感想など、待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5101z/>

病室の私と外のあなた

2011年12月17日10時51分発行